

日本基礎教育学会

(The Japanese Association of Fundamental Education)

会報 No.48

令和5年12月15日

一緒に21世紀の日本の教育を考えましょう。

令和5年度 日本基礎教育学会月例会

日本基礎教育学会では月例研究会を持ち、先駆的な実践を進めておられる先生方より報告をいただき、基礎教育のあり方について、研鑽を積んできた。今年度の研究テーマは、昨年度に引き続き、「危機の時代からの再生に果たす基礎教育のあり方」と設定した。コロナは5類に移行したが、子どもたちへの影響は計り知れないものがある。子どもたちに何が起こり、教育現場をどう支えていくのか、基礎教育のあり方を検討していきたい。令和5年度は、月例会の発表者を会員より公募し、研究部長を中心に調整を進めた。遠方からの参加者も増えており、月例会は昨年度に引き続き、Zoomで開催とした、月例会の内容は以下の通りである。

<第1回 月例会>

1 日時 10月7日(土) 15時00分～16時30分

2 発表内容 カンボジア農村部における教育の可能性

—幼稚園と小学校に着目して—

今、この世界の動きは不安定で、何が起こるか予想できない状況である。カンボジア農村部に関わった事例を基に、すべての子ども達に質の高い教育(SDGsの視点)を受けられることの重要性、可能性を紹介する。

3 発表者 仲井 勝巳(聖学院大学)

<第2回 月例会>

1 日時 11月4日(土) 15:00～16:30

2 発表内容 幼児教育・保育領域における教育相談についての一考察

—生徒指導とのつながりに向けて—

幼児教育・保育領域の日常的な教育相談は、「教育相談」と認識されていないものが多い。「生徒指導の一環」としての教育相談につながる幼児教育・保育領域の「教育相談」の追究に向けて、その理念を「生徒指導」「教育相談」の歴史を通して考察する。

3 発表者 本多 祐子(中部大学)

<第3回 月例会>

1 日時 12月2日(土) 15:00～16:30

2 発表内容 「主体的・対話的で深い学び」を推進するための経営戦略

—持続可能な「主体的・対話的で深い学び」を推進する学級力の向上—

「主体的・対話的で深い学び」を推進するため、指導方法からの授業改善・研究は様々に行われている。本研究は、「主体的・対話的で深い学び」の推進を図るための経営戦略として、学級づくりに着目し、そのフレームとシステムを開発し、効果検証を行った。

3 発表者 小瀬 和彦(昭島市立拝島第二小学校)

それぞれの先生方の専門性を生かし、貴重な提案をしていただいた。

参加者は、第1回7名、第2回24名、第3回31名であった。会員以外にも、学生の参加もあり、Zoomでのグループ協議の意見交換も、活発に行われた。

以下、今年度の月例会の報告を掲載する。学会として共通理解を深め、これからの時代を支える基礎教育のあり方を今後とも求め続けていきたい。

(文責 高橋)

第1回定例会

カンボジア農村部における教育の可能性 ―幼稚園と小学校に着目して―

仲井勝巳（聖学院大学）

【発表概要】

私が小学校教員1年目に迎えた冬休み、2009年12月にカンボジア農村部を訪れて、小学校建設に携わった。その後、何回かカンボジア農村部を訪れて、現地に泊まったり、子ども達と関わったり、村人と交流したりした。

カンボジアは、ポル・ポト政権による大量虐殺やその後の内戦により、40代以上の人口は少なく、カンボジア国民の平均年齢は23.9歳で、非常に若い国である。近年、高い経済成長率を続けて、都市部の発展が目覚ましいものの、農村部では貧困に苦しむ人が多く、教育環境も厳しい状況にある。内戦により、教室や教師が不足しており、多くの学校では、授業は午前と午後の2部交代制になっている。カンボジアの教育制度は日本と同じ6・3・3制で、最初の9年が義務教育だが、修了率は、初等教育87.4%、前期中等教育48.1%と低く、多くの子どもが義務教育を終えていない。

小学校教員の実務経験を活かし、環境教育や科学教育の視点で、小学校や幼稚園で授業を行った。科学教育では、糸電話を取り上げた。子ども達は、糸電話で音が聞こえる不思議さ、面白さに気付く、興味を持って、生き生きと活動していた。学校に必要な教材が不足していることもあり、身近なものを教材として活用することが、子ども達の学びに繋がっていくことを示すことができ、現地の先生方にも評価していただいた。

今、この世界の動きは不安定で、何が起こるか予想できない状況である。教育の世界において、教師、子ども達、保護者、そして、その地域の人々が、何の脅威を感じることなく、学びが保障される世界であってほしい。そのために、まず自分が考えること、そして、他者と協力して学びに向かうことは重要だといえる。すべての子ども達に質の高い教育（SDGsの視点）を受けられることの重要性、可能性を探り続けていきたい。

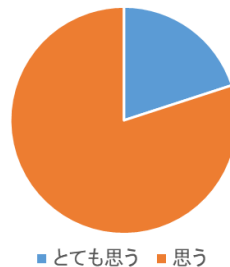
【協議】

仲井先生の提案で、WEBアンケートを実施し、協議の参考とした。参加型の協議のスタイルとして興味深いものであった。

<アンケート結果>

（仲井先生よりWEBアンケートのデータを提供いただき、一部を紹介する。）

本日の内容は満足する
内容だと思いますか



理由

- ・海外の幼稚園や小学校の様子を見たことがなかったので、写真や動画で見ながらお話を聞くことができ、貴重な経験となったから。
- ・様々な経験をお話いただき、考えさせられた。
- ・グローバルな仲井先生のフィールドワークが素晴らしかったから。
- ・地球に暮らす誰もが幸せになるのは難しいことだが、やらなければならないことであると実感したから。

<参加者の感想>

- 実際に現地に行って、自分の目で見て、感じ取ることの重要性を感じた。
- WEB環境も十分に整っていない状況にあって、カンボジアの教育の再生は厳しいものを感じる。だからこそ、私たちが関心を持ち、可能な支援を続けていく必要がある。
- 持続可能な開発のための教育は、指導要領にも盛り込まれたが、実践が進んでいるとは言い難い状況である。次代を担う子供たちに、しっかりと指導していかなければならないと改めて感じた。
- 教員となった学生が、志を持ち青年海外協力隊として海外にわたり、事故にあい、命を落とした。思いは、ゆっくりと形にしていくことも大切だと教えておくべきだったと後悔が残っている。興味深い発表だった。

【発表者コメント】

お忙しい中、第1回定例会にお集まりいただきありがとうございます。今回のテーマを発表する際に、私が小学校教員時代の経験を踏まえてお話させていただきました。小学校教員1年目の時に訪れたカンボジアの農村部で子ども達と関わり、「教育とは何だろうか？」と自問したことを、今でもはっきりと覚えています。子ども達の学ぶ権利は、どの国でも、どの地域でも保障されるべきものだと思います。子ども達に質の高い教育（SDGsの視点）をとということで、かつて学校や幼稚園がなかったカンボジア農村部の事例を基に、幼稚園の紙コップタワーの動画を紹介し、子ども達がどのように遊んでいるのか（学んでいるのか）等を紹介しました。今回の定例会には、大学教員（研究者）や大学生の方も参加され、世界の教育事情、私の活動に興味を持っていただいたようで良かったです。今後も教育・研究活動を頑張りたいと思います。ありがとうございました。

【発表概要】

多様な試みをされている教育相談であるが、幼児教育・保育領域における教育相談の追究に向けて、その本質を探究していく。生徒指導提要(改訂版)では、教育相談は「生徒指導の一環」として、生徒指導と教育相談を一体化させ、全職員が取り組むべきとされているが、その認識はあいまいな現状と思われる。また幼保小の接続の重要性も取り上げられているが、具体策はあいまいである。幼児教育・保育領域では、子育て支援のための教育相談、就学を前提とした教育相談の研究例はあるが、発達支援的・課題予防的取組としての教育相談の研究例はあまり見当たらない。教育相談として意識されないで取り組まれているのが現状である。教育相談は、歴史的には、産業発展と社会変化に子どもを適応させるために学校に求められる役割として機能してきたが、その過程では、心理臨床的な対応と教師のあり方の混乱などがあり、生徒指導との統合が図られていた教育相談が、誤解や対立・混乱を抱えたまま今日に至っている。「生徒指導」「ガイダンス」「キャリア教育」「カウンセリング」に貫かれているものは、社会的な自己実現に向かう主体の醸成と捉えられる。そのためには、気になる子供の言動は、教育・保育・子育てへの問い直しを求めるメッセージととらえる姿勢、大人の権力性の自覚、子供の拒否を前提とした指導観などが求められる。甘えたくても甘えられない子供、甘えさせたくても甘えさせてやれない母との関係のずれの修復も課題である。この状況においては、本来の自分の思いから発生する主体性は生まれにくく、成長過程において常に何かの力で動かされているような思いを抱いて成長していくことになる。育ちの主体はあくまで子供である。

幼児教育・保育領域では教育相談は研究途上にあるが、「生徒指導の一環」につながる教育相談に向けて、追究していく必要がある。

【協議】 (○：参加者の発言 ➡：発表者の回答)

- 発達障害、知的障害を教育相談の中でどう対応していくか。
➡インクルーシブとして対応されているが、特別支援教育として分離教育を行っている現実もある。
- 発達障害は認知の問題、愛着障害の問題となってきているのではないか。
➡捉え方は研究者の背景により様々であるが、原因がいずれにあっても関係性に着目した支援が有益である。
- 幼保の現状をどうとらえておられるのか、実態を知りたい。幼児の表現の読み取りは大変ではないか。
➡子供の表現を読み取るのは難しい。言語化の支援が必要である。幼児教育の現場では、主体的に遊んでいる子供に、大人がかかわることで、主体性を潰してしまうこともある。非言語を読み取る努力も必要である。

<参加者の感想>

- 教育相談は特別な配慮を要する子供への支援にとどまらず、すべての子供にとって重要なものとなってきた。子供の貧困が背景にあり、教育相談が命にかかわる状況もでてきており、今後の進展に期待したい。
- 社会の中で自分らしく生きること、主体的な生き方を応援していくことの重要性を改めて感じた。
- 甘える、甘えられる関係がない子供たち、教育相談でその関係を作っていく必要があると感じた。
- 小学校の授業の在り方は重要であり、幼保小の連携のあり方を考えていく必要がある。断る力も主体的であるということが参考になった。どんな子も受け入れられる教員になりたい。

【講評 庭野正和先生】幼児教育・保育領域の教育相談にかかわる文献研究の結果は興味深いものであった。隅々までしっかりと研究されていると感じた。自己を見つめ直すよう促す教育相談が進んで行くことを望んでいる。人生の初めの5、6年、その重要さを理解し、子供の気持ちを汲み取れる教育の在り方を求めていきたい。

【発表者コメント】

教育相談は、初中等教育領域を中心に対立や混乱を抱えたまま議論が重ねられてきたが、研究途上にある幼児教育・保育領域の教育相談の追究に向けて、「生徒指導の一環」につながる理念の追究を図った。研究会の参加者との協議では、障害や貧困等、背景と共に向き合うべき教育相談の課題を改めて考えさせられた。主体を培う幼児教育・保育領域の教育相談に向けて、大人が権力性を自覚し、子どもが非言語・言語で表現する保育・教育・子育てへの問い直しのメッセージを、関係性や背景の中で掴みとる力が求められると思われる。本研究では理念的なものを示したに過ぎないため、今後は、より具現化につながるための研究や、実践例からの考察などに取り組んでいきたいと考えている。

第3回定例会

「主体的・対話的で深い学び」を推進するための経営戦略

ー持続可能な「主体的・対話的で深い学び」を推進する学級力の向上ー

小瀬 和彦（昭島市立拝島第二小学校）

【発表概要】

平成28年度、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について方向性が示される。「主体的・対話的で深い学び」の推進を図るためには、児童一人一人が学級という集団の中で切磋琢磨し、学び合い、教え合いができるような学級づくりが求められるが、集団づくりの取り組みは課題となったままである。学級力の向上のためのフレームとシステムの開発が求められている。そのため、次のような取り組みを行った。

- ① 学級力スタンダードの開発：「主体的・対話的で深い学び」を成り立たせる要件を授業観察等から共通点を分析し、教職員の意見も反映させ、5項目を設定した。「主体的・対話的で深い学び」を支える要件を同様に5項目設定した。これら10項目を「主体的・対話的で深い学び」を推進するための学級力の向上を図るための評価指標として、「学級力スタンダード」を作成した。
- ② 「学級力スタンダード」のPDCAサイクル化：「学級力スタンダード」で児童一人一人が自分たちの学級を評価し、その結果を「レーダーチャート」にまとめ、各学級で話し合い、課題を把握し、解決策を立案・策定する。解決策等の共通理解を図り、共通実践していく。このような活動を、5・7・12・2月に繰り返していくことにより、学級を児童自ら向上させていく。

5年生時にかなり厳しい学級状態にあった学級も、6年生になり、「学級力スタンダード」の分析から、学級の課題を「言葉の遣い方」にあると焦点化し、段階的に取り組むことにより、学級力を向上させていった。さらに、学級力の向上は、学力の面でも影響を及ぼしていった。今後、「学級力スタンダード」における10の評価指標を、吟味・検討していき、複数年度の実施により、精度を高めていきたい。

【協議】 発表を受け、6つのグループで話し合いをもち、結果を共有化した。（➡：発表者の回答）

グループ1：「主体的・対話的で深い学び」の授業研究はあるが、集団づくりの取り組みは新たな発見であった。
グループ2：学び合い、教え合いのできる学級づくりへの変化を確認できるシステムの構築がされており、興味深かった。先生方の学級づくりの取り組みも具体的に知りたい。

➡子どもたちの見方を先生方は意識せざるをえない。子どもたちの話し合いは大きな刺激になっている

グループ3：学級力スタンダードの意識化は、高学年になるほど難しい。見える化することで、意識することができる。模造紙に対応策を書き出して、共有化を図るなどの方法も工夫できるのではないかと感じた。

グループ4：「学級力スタンダード」のPDCA化は、先生方が学級を準拠集団化することに本気になって取り組む意欲を引き出すことにもつながっていく。学級力向上に向けた先生方の具体的な取り組みを知りたい。

グループ5：子どもたちが自分たちで学級を創り上げていくために、継続的な取り組みが大切であると感じた。

グループ6：「主体的・対話的で深い学び」は、学習活動を中心に考えがちだが、学級活動から入ることは興味深い。これらの活動を支えている学校としての要件があるのではないかと感じた。

➡学級力スタンダードのPDCA化は、先生も子どもたちも自分事として取り組んでいくための経営戦略である。

【講評 後藤 彰先生】 学級経営から、「主体的・対話的で深い学び」を考えていくのは、重要な視点である。学級経営の成果は、体育の授業にも如実に出てくる。さまざまな部分にかかわってくるものである。PDCA化を図ることは、継続できる要素となり、評価することにより、手立ても見えてくる。「主体的・対話的で深い学び」を子どもたちにどのように分かりやすく伝えるか、具体的な活動に移していくか、考えていく必要がある。小瀬先生の今後の取り組みに期待したい。

【発表者コメント】

関心・意欲にあふれ、質の高い意見や質問をいただきありがとうございました。今回、授業改善という視点ではなく、学び合い・教え合い切磋琢磨するという学級力向上という視点から、「主体的・対話的で深い学び」の充実を図りました。また、学校経営戦略として、本校全18学級が「学級力スタンダードのPDCAサイクル化」に取り組んだわけですが、その結果を集約・分析してみると、次の2点が明らかになりました。第1点は、「児童の話し合いが活発に行われる学級ほど、学級力スタンダード（10項目）の達成率は高い」こと、第2点は、「学級力スタンダード（10項目）の達成率が高い学級ほど、学力の調査の結果が向上している傾向がある」ことが明らかになりました。今後、学級力スタンダードのシステムも含め、吟味検証していきます。